

成★少年

「龍を育てよう。」と、アオイが云った。

此處は都会から離れた場所にある、森のなかの學び舎。校舎の周りには季節の移りと共に装いを樂しむ木々、囁くように流れ續けるせせらぎの音、澄んだ風と戯れる小鳥たちの声、手を伸ばせば掴めそうな大きな雲が蒼く高い空に飛んでいる。いつでも時間が止まったようにすすむ、閑で美しい處だ。ぼくらは寄宿舎に身を寄せている。

壹

青々とした葉がいつそう深く色づく、まぶしい太陽の季節

「何を云っているんだ、龍なんて存在するわけがない」

と、少しからかうようにナツキが問う。

これを見てよと、アオイが手のひらに包んでいたひと粒の落花生を二人の目の前にそつと差し出した。見たところごく普通の落花生だ。だが、向いに座っていたシュウが立ち上がり近づいて、眼を細めてよく眺めてみると、其處には。

「…龍だ…！」

龍がいた。割れた殻のほんの隙間から、まだあどけない可愛らしい顔を覗かせている。

ナツキがアオイの手から少々乱暴にそれを手に取り、噛みつくように見入った。

「そんなばかな・・・！」

「な？龍が眠っているだろう？」

どうだ、と云わんばかりにアオイが笑う。仲は良いが一番年少のアオイは、いつも何かと二人に逆らえないでいる。そんな彼は、今日だけは。

それは小一時間前のことだった。

本日の授業が終わり、いつものようにシュウとナツキと約束していた秘密の場所、林の奥にある、少年三人が入って遊ぶには丁度良いくらいの小さな洞窟で冒険するために校舎の中庭を通り、道とは到底呼

べない近道を急ぎ足で進んでいた時。ふと眼に留まった、往く手を阻むように足元に落ちていた落花生。遅刻すると文句を云われるのは充分わかっていたが、どうもこの落花生が氣になり、そつとつまんで、じつと、観ると。

「こいつ、ほんとうに生きているのかな」

二人に大きな顔で自慢しようと思気揚々と洞窟へ走って来たアオイは、ナツキのこの言葉に何だか少しがっかりさせられたが、確かに、龍は息をしているのだろうか。確認しようにも小さ過ぎてその吐息は彼らには聴こえなかった。

「そつ…育てればわかるさ！」

急に自信がなくなり戸惑いを隠すように慌てて口にした言葉は、自分自身の自信を余計に薄れさせるものだった。

だが、今まで黙って二人のやり取りを聴いていたシュウが、

「そうだな、面白そうじゃないか。」

と、言葉を割り込ませた。アオイもナツキも、突然口を開いた彼に驚き、おおきく眼を見開いた。シュウ

は落花生を指でつまみ、少し仰け反って陽にあててみる。アオイに氣づかれないようにナツキに眼で合圖をしながら言葉を續ける。

「俺は乗ったぜ、最後の、いい思い出になりそうだ。そうだろ。ナツキ？」

反論をさせないような、つよく、そして楽しそうなシュウの様子に上手く云い返せず、まあ、シュウがそう云うなら……と、渋々ながらナツキも同じた。

ぼくらは來年の春に、この校舎から去る。

アオイは附屬の校舎へ進級する。

ナツキは都会の學び舎へ進學する。

シュウは父親の仕事を繼ぐ爲に遠いまちの家へ戻る。

こんなふうにもいつでも話せて、秘密の場所に三人が集まれるのは、きつと今だけだ。

三人は龍を小さなシェアレに入れ、代わる代わる看ることにした。

ナツキの云う通り生きているのか不確かではあるが、彼らは優しく温め、今日はどんな具合だったとか、表情が動いたように見えただとかを、秘密の場所ですの日の様子を報告し合っていた。

そうしているうちに、いまいち自信が持てなかったアオイも、疑い深かったナツキも、実は冗談のつもりで興に乗ったシュウも、この龍がほんとうにふ化する時を待っていて、いつか眼を醒ましてくれるのではないかと想えてきた。

味氣がないので、この龍に名前を付けようとナツキが云った。

それからぼくらは眞剣に悩み、図書室で様々な本を読んで調べ、授業中も教師の話もろくに聞かずノオトにびっしりと名前の候補を書いて考え、三日かけて決まったものが、“WYVERN ワイバアン”だ。

WYVERNとは英国の傳説の龍のことで、軍隊の紋章にも描かれるように強さと誇りの象徴であり、そうなるってほしいというぼくらの願いも込めて名付けた。

アオイはワイバアンを看る順番がきたら、必ずまっすぐ寄宿舍に戻り、自分の部屋の窓辺にシャアレを置き、月明かりの下で彼に話しかけた。少しばかり瑕の付いた硝子が上品にはめ込まれた眞白い梓から

漏れる、うつすらと蒼い空色に照らされた彼はとても美しく、でも果敢ないようで、ぜい弱なその命を寒くないようにハンカチで包み、シャアレの隣にそつとランプを置いた。

寄宿舎は二人一組の共同部屋であつたが、アオイは學年の人数の關係でルウムメイトは居なかつた。だから部屋で堂々と彼と会話が出来るのだ。夜の間はずつと独りで、心細く感じるのにも慣れてしまつたアオイにとって、彼が居てくれるおかげで、前とは違い部屋に戻るのが待ち遠しくなつた。

「今日ね、洞窟へ往く途中の道で、…そう、ちょうどきみと出逢つたあの辺りで、ちいさな蒼い花を見つけたんだ。もうすぐ寒い季節になるというのに、めずらしいよね。がんばつて咲いていて、ぼくも元氣になつたよ。」

窓の外に浮かんでいる月がゆつたりと流れる雲にすしその姿を隠すたび、光がほのかに反射してシャアレがさらさらと輝く。それは彼が相づちをうつてくれているようだった。

「きみにも今度みせてあげるね。きつときみも元氣をもらえるよ。…はやくきみが眼醒めるといいなあ。」ふたりの、会話はつづく。

「そのあとね、シュウとナツキと、森の奥のほうまで往つてみたんだ。そうしたら其處には小さい泉があつてね、みたことのない生きものが泳いでいたんだよ。薄翠色で、少し紅い部分も視えた。あれはなん

だろう……もしかしてきみの友達かもね。」

ふふっと、わらった顔はどこかごちない。

「きみは仲間がいなくて、さみしくない？……」

ぼくらが傍に居ても、さみしいだろうか？

「もし、ぼくがきみなら、きつとさみしいなあ……」

冷たい風がブラウス一枚のアオイの肌を透き通っていく。彼におやすみと挨拶をし、窓を閉めて、暖かいベッドに潜りこんだ。

ナツキはルームメイトに、ワイバアンを見られるのではとかなり警戒していた。

部屋にいる間はベッドの中にシャアレごと入れ、そこから動かすことは極力避けた。だからワイバアンと過ごす場所は決まって図書室だった。

勉強を怠らないため、授業後にシュウとアオイとの約束がある日以外は殆ど此處で本を読んで過ごしていたナツキには、お氣に入りの席がある。

いちばん奥まったところにある窓際、机がぴったりと壁に寄せられた一人用の席で、しかも入口からは

本棚に囲われ陰になっていて見えない。一部の騒がしい生徒の話し声も聴こえにくい。うん、スマイレが描かれたステンドグラスの窓に陽が当たるとサンルウムのよう心地よく、集中するには最適の場所だ。

ワイバアンを連れていると制服のポケットに隠していてもなかなか落ち着けず、周りをちらりちらりと気にしながら席に着く。木でできた簡素な作りの椅子は、長時間座っていると身体に負担がかかると生徒たちからよく不満の声を浴びていたが、ナツキにとってはそのひんやりとした感觸が何故か、すうとよく馴染む。椅子と同じ色の机の真ん中より少し上の場所に彼を置き、本のページをめくる。

最初の頃はいつものように静寂を護るため自分にだけ本を向けて読んでいたが、彼に読み聴かせたらしめしかしたら何か様子が変わるのではないかと思い、彼にも見えるよう本を机の上に広げ、ゆつくりと、静かに文字を囁いていった。

声でひとつひとつ言葉を綴っていくと、一人で黙って読んでいるより、何故だろう、内容や意味が意識のなかに溶け込むようにすんなりと入っていく、そしていつもよりずっとずっと楽しかった。

さみも楽しいだろうか？そうだったら嬉しいな。

ちらりと眼を流し彼を見つめて、本がもっと見えやすいように自分のほうへ引き寄せた。

何冊、いや、何十冊でも読んであげよう。いつか眼醒めたとき、この言葉たちを覚えていてくれるよう

に。この声を憶えていてくれるように。

きつと、忘れないでいてくれるように。

シュウは頼りがいがあり人当りも良いので、生徒たちからの人気があり、一人でいるところを見たことがない。周りにはいつも誰かしら集まって、明るい声が絶えなかった。ほとんど常に体を動かしているので、持ち歩きやすいように、蒼い皮の紐を付けた小瓶にワイバアンを入れて首から下げ、ブラウスの内に仕舞っていた。

そういえばおまえの親父の仕事っていったい何だったかと、今しがた終わったばかりの歴史の授業のなかで教師が進路についての話題を出したからか、シュウの席の斜め前に座っている生徒がふと、問いかけた。近くでその声を聞いていた数人の生徒たちも、答えに興味津々と、次々と振り返る。シュウは使っていた教科書とノートを片付けている手を休めることなく、時折目線を上に向けながら應える。

「輸入とか輸出とか、貿易関係の仕事だよ。事務的でお偉いさんにぺこぺこ頭を下げるだけで稼げるぜ。楽なもんさ。」

この冗句に、どっと笑いが起こる。相変わらずの教室の様子だ。それから生徒たちは楽しそうに親の仕

事のことを話題にしはじめた。だが云った当の本人は、笑顔を保ったまま、嗤っていた。

シュウは自身の父親のことが余り好きではなく、きつとむこうも好くは思っていないと思う。だが長男に仕事を引き継ぐのは習わしであつたので、ほとんど仕方なく受け入れた。

この學び舎に入學したのも、父の言い付けだつた。何でも先に勝手に決めてしまうことに對して憤りはあつたが、それよりもどうしようもなく逆らうことが出来ない自分の非力さを恨んだ。このまま誰かと似たような人生を過ごすのかと思うと、なんて詰らないのだと、いつも嗤つた。

でも唯一よかったことが、アオイとナツキに逢えたことだつた。ほんの短い間であつたが、彼らが、誰とも似ていない、他の人と違う時間を過ごさせてくれた。三人でいることが、ほんとうに自由になれることだつた。そしてきつと、これからもそうなるだろう。

「おまえも自由になれよ」

独り言のように、シュウは彼に微笑みながら云つた。

こうして彼らとワイバアンとの生活は、誰も知らない、ぼくらだけの、特別な秘密になった。

色とりどりに染まつた景色が、少しずつ剝がれはじめる季節

ある日。

時限と時限の間の休み時間、シュウがクラスの友人たちと、昼食はもうすぐだ、今日のメニューは何だろうと、他愛のない話をしていた時、ドアが教室の中で一番大きな音を響かせ、唐突に開いた。

其處にいた生徒たちが一斉にそちらへ顔を向ける。一瞬、静寂が漂ったが、その空気がナツキの大声で書き変えられた。

「シュウ：ッ、ワイバアンが・・・！」

ナツキの傍に張り付くようにいたアオイは青ざめ、今にも泣きそうな顔をしている。

彼らの様子を見るなり、戸惑う生徒たちを構いもせず押し退け、シュウは教室を飛び出した。

二人の後に付いて白い木目の廊下を走りながら、事情を伺う。

この日、彼を看ていたのはアオイだった。いつものように部屋の窓辺にシャアレを置いていたが、この休み時間に様子を見に戻ってみると、彼の姿だけがなかったのだ。そして、閉めたはずの窓が開いていた。

あわてて寮長に、私物が無くなっていると伝え、寮長は申し譯なさそうに、

実は上の階で水漏れがあつてね、君の部屋にも確認をしに入ったらやっぱり少し水が染みていて、業者を呼んで修理と掃除をしてもらつたんだ…きつとその時に窓を開けて閉め忘れてしまったんだね…申し譯ない、無くなったものは何だい？掃除中は私も一緒に見ていたから、その人たちが盗んだとはあまり考えにくいが…

と、話したという。

ギシギシとまるで彼らを焦らすように、木の廊下が素早く、強く、リズム良く音を立てる。

「鳥にでも食べられてしまったのかな・・・」

アオイは涙をこらえるのにも必死につぶやいた。

「部屋のなかはもう全部搜したのか…ッ？」

ナツキの問いかけに、今にも消え入りそうな声でアオイはウン、と答えた。

「とりあえず、寄宿舎の外を視に行ってみようッ…」

力強くシュウが叫んだが、その声は震えていた。

三人は校舎の外へ出て、校舎の裏へ、運動場へ、中庭へ、森の奥へ、奔りまわって彼を捜した。すでに始業の鐘は鳴っていたが、そんなことは全く氣にも留めずにアオイもシュウも、普段は絶対に遅刻や欠席をしないナツキも、空が美しい紅に染まるまで、あのちいさなちいさな命の名を、應えてくれないかもしれない彼の名を、呼び続けた。

氣がつけばいつものあの、秘密の場所にいた。あちこち視て廻って、ずっとずっと遠くまで奔っていったつもりだったのに。

「……もしかしたら目覚めて、飛んでいってしまったのかもね」

ナツキが視線を地面に落としながらため息をついた。

「……そうだな。……ああ、残念だったな、ふ化する瞬間を観たかったのに。」

もう昏くなった夕暮れを仰ぎながら何處かへ向かってシュウが云う。

そんな二人の言葉を聞きながら、アオイは口をぎゅつとつぐんでいた。

とぼとぼと、泥だらけになった足と身体を運びながら寄宿舎に戻ったのはすっかり陽が沈んだ後だった。その間ぼくらは何も話さなかった。

一日の半分の授業を受けなかったことと制服を汚してきたことで教師と寮長にこっぴどく叱られた。一週間の謹慎と課題を罰として与えられた。でも不思議なことに、これに對してまったく嫌な気持ちにはならなかった。

それぞれの部屋に戻る前に、どうしても彼が居たシャアレが見たくなって、シュウとナツキはアオイに付いていき、誰にも見られないようにこっそりと部屋に入った。

シャアレは今日も、月の光を受けてきらきらと観える。ぼくらはすこし怖いような気持ちになりながら、ゆつくりとそれに近づいた。

其處には。

落花生が、入っていた。

とくんつ、と、耳の傍で大きく音が鳴った。彼が顔を覗かせている割れた部分は下になっていたが、見間違うはずがない。殻の大きさも形も模様も確かにすべて、ずっとずっと捜していたあの落花生であった。

ぼくらは顔を見合わせ、驚かせないようにアオイがそっと持ち上げた。ごめんね、ごめんね、と、ぼろぼろと涙を零しながら。

だが、そこには、彼の姿はなかった。

代わりに殻の中には、ちいさな実がふた粒、顔を覗かせている。そして割れた部分からぼとぼと、床に轉がり落ちてしまった。

これは確かに、あの落花生だが、ただの落花生であった。

春、ぼくらは校舎を去った。櫻の花びらが景色を彩るように舞い散り、祝福し合うような心地よい暖かい日和のなかで。

最後、別れるまえに、秘密の場所に集まり、其處にあの落花生を埋めた。

ぼくらはもう逢えないだろう。此處にはもう戻れないだろう。こうしてぼくらは大人に成っていく。

でも、ぼくらがきみたちと出逢って過ごしたあの日々は、ぼくらを“少年”にしてくれたのだと思う。

了